

いすみ鉄道、夢を乗せて今日も走る！

廃線ギリギリのローカル線に挑む異色の公募社長

千葉県の大原から上総中野までを走るローカル線のいすみ鉄道。国鉄時代の赤字ローカル線がJRとして分割民営化された際、不採算路線として切り捨てられた路線の一つ。昭和50年代、沿線の人々の努力によって第三セクターが運営する鉄道になったのちも赤字が続き、経営建て直し策として公募で社長を募集。現社長の鳥塚亮氏に話を聞いた。



とりつか あきら
鳥塚 亮 社長

■公募で社長の道へ -49歳の挑戦-

廃止か存続か。就任以来、経営改善に取り組み続け、2010年8月「いすみ鉄道再生委員会」でいすみ鉄道の存続が決定されることになりました。今のように注目を浴びようになるまでにはさまざまなドラマがありました。社長になる前は、英国航空に勤めていました。でも、この場で働き続けることに自分の成長の限界を感じていました。そんななか、妻からいすみ鉄道の社長公募を知らされました。子どもの頃から鉄道が大好きだった僕は、若い頃、鉄道の道に進むことを一度諦めていました。「自分はもっと大きな仕事がしたいんじゃないか」。日頃から悩んでいたことを知っていた妻がきっかけをくれたのです。年収が半分以下になる、公募に落ちて失業するかもしれない、そんな不安を抱えながらも、最後は家族の応援があって応募を決意しました。応募した当時は受かるとは思いませんでしたよ。そして幸運にも、2009年、いすみ鉄道の公募社長として採用されたのです。

■ローカル線の可能性に学べ

社長になってからは鉄道マニア的な部分はすべて捨て、ビジネスの視点で見えています。僕が来たときは、地元の人たちがなんとかいすみ鉄道を守ろうと、自分たちで当番を決めて用もないのに列車に乗っていました。僕は車で通勤してたからみなさんの反感を買いましたよ。でも僕がいすみ鉄道を残したいのは、この「地域」を残したいからです。いすみ鉄道は地域の人々が生活のために使っています。おもに小中高生の通学と、お年寄りの通院や買い物で、利用者は1日あたり約1500~2000人です。実はこの規模なら鉄道ではなくバスで十分まかなえる。でも地域社会にとって

駅が一つなくなるということのデメリットはものすごく大きい。駅がなくなれば人が集まってくることもないし、地図にも駅名が載らなくなる。これは町そのものが消えてしまうことに等しいことといえます。だからこそ乗客が少なくても鉄道を残すことに意味がある。乗客数を増やそうと躍起になるのではなく、地域社会における鉄道の可能性をどれだけ広げられるか、それを考えていくことにローカル鉄道の今後があると思っています。そのために打ち出したのがいすみ鉄道の「観光鉄道化」です。いすみ鉄道を観光客を呼ぶためのツールにするのです。ローカル線には限りない可能性はある。それを何にも使わないで廃止にするのは、僕ももったいないと思います。

■観光鉄道化大作戦

「何も無い」この地を売り出すために、ムーミンのキャラクターをほどこした車両をつくりました。ムーミン谷の、自然に囲まれて穏やかに生活する人々のようすがまさにこの地にぴったりだと思ったからです。こうすることでムーミンに馴染みのある40代以上の女性たちがお客様として来てくれます。また物販にも力を注ぎ、記念乗車券などのオリジナルグッズ、いすみ鉄道もなかや駅弁など食べものまで、各駅の商工会議所や地元企業の協力を得ながらさまざまなものを販売しています。売り上げは2008年度が約1400万円だったのに対し、2009年度は約2200万円に跳ね上がりました。これは社員をはじめ、いすみ鉄道を応援してくださる地元の方々のおかげです。また、最近ではジャニーズJr.とコラボレーションした車両やグッズも導入し、普段いすみ鉄道とあまり縁がないお客様にも来ていただけるようになりました。このおかげで、ローカル線なんて全く興味のなかった若い

女性もいすみ鉄道に来てくれるようになったのです。彼女たちから、いすみ鉄道でこういう電車が走ってたよ、と話題が広がっていく。その話を聞いた100人のうち1人でもいすみ鉄道に行ってみようと思ってくれればそれでいいわけです。

■訓練費用自己負担運転士とは

鉄道業界では運転士の高齢化が問題となります。いすみ鉄道も赤字を抱え、新卒の学生を何年もかけて運転士に育てる余裕はありません。一方で世の中に電車の運転手になりたい人はいっぱいいるはずだという思いもありました。そこで僕は鉄道の規則を調べ、ある秘策を考えたのです。それが「訓練費用自己負担運転士」です。鉄道の運転士になるための条件は、満20歳以上であること、鉄道会社の職員であること。この二つを満たせば、誰でも鉄道の運転士になれるのです。これに着目し、「訓練費用700万円を自己負担していただければ運転士になれます」という施策を打ち立て、「うちで夢を叶えませんか」と呼びかけました。2013年3月までに5人の運転士が誕生しました。訓練生は現在5人おり、そのなかにはお子さんをもつ40代の女性もいます。今回は2期生として60歳の人が免許をとりました。この施策は当然あらゆるところから批判されましたが、運転士も訓練生も本当に一生懸命やっています。だって、これまで勤めてきた会社をやめて、700万円という決して安くはない金額をはたいて来ているんですから、覚悟が違いますよね。それに何よりみんないきいきとしています。年齢や性別に関係なく、自分の努力一つで夢を叶えることができる。自分にはできると信じて、その分リスクをとるのであれば、それはチャレンジするべきです。自分が50代手前にして航空会社をやめて、鉄道会社の社長にチャレンジしようと思ったから、自分のような人が1人でも増えると世の中が明るくなるし、活性化すると思うんです。

■地元の中高生との絆

また、いすみの地に可能性を感じたのは、「中高校生いすみ鉄道存続プロジェクト会議」です。これは沿線の学校に通う中高生が定期的に集まって、いすみ鉄道存続運動について話し合う会議です。



上：いすみ鉄道デンタルサ
ポート大多喜駅のホーム
右：駅を清掃する中学生たち



周りの大人が沿線の草刈りや駅の掃除をしている姿を見て育った子どもたちは公共心が高い。地域を自分たちの手で守りたい、この思いがある限りこの地域は大丈夫だと確信しましたね。2011年には会議で駅弁を売る案が出ました。実はいすみ市大原漁港は伊勢エビの漁獲高が日本で1、2位を争うくらいの産地なんです。そうした全国に発信できる地域のすごさが埋もれてしまっている。でもいすみ鉄道を使えば効果的に売り出せるんじゃないか。そこで1日4食、土日限定の伊勢エビ弁当が誕生しました。ほかにも高校生たちが出演する能とオペラの舞台をしたり、この前は、奥会津の福島県ローカル線と協力して雪を運んできて、雪祭りをやったりしたんです。子どもたちにはいすみ鉄道でいろいろな経験をしてほしいですね。

■夢を叶える社長、まだまだ挑戦！

よく周りから「いすみ鉄道は社長でもってる」といわれてしまうのが現状です。僕がいなくなったとしても、まわっていく組織、収益を上げていける体制をつくることが私の一番の課題です。ほかには、いすみ鉄道という看板を使って新たなビジネスにも挑戦したいと思っています。

世の中、新聞やニュースを見ても、いやなことはたくさんあります。そういうのを見ていると子どもたちも大人になんかなりたくないと思うでしょう。でも大人になるってことはすごく楽しいこと。もちろん社会的責任もついてくるけど、夢が実現することが大人なんです。僕みたいにいづもにこにして楽しそうな大人はいっぱいいます。大人になるのをぜひ楽しんでほしいと思います。